

夏イチ！本番、憧れの劔岳（個人山行）

（報告）TM

◎期日：2025年8月2日（土）～4日（月）

◎メンバー：TM（L）、FJ（SL）、KM

[瑞牆山・金峰山](#)から2週間、やってきました本番の劔岳。この前週、子供キャンプに引率参加し、暑さとハードワークで体調を崩した。熱中症かと思ったがどうやら風邪で、治りきらないうちに山行の日が来てしまった。風邪薬、咳止め、のど飴とマスクをいつでも使えるように手元に携え、8月1日の深夜バスで富山に発った。

富山地方鉄道で立山駅へ、ここから立山黒部アルペンルートに入った。室堂に向かうバスはぐんぐん標高を上げ、風邪っ引きは耳抜きに苦労する。わずかに3mほど残った「雪の大谷」の手前で雲の上に出て、10時を大きく回ってお日様輝く室堂（標高 2420m）に到着した。予定よりだいぶ遅れたが、今日はキャンプ場に着くのが目的だし、時間の余裕はあるので大丈夫。見上げれば立山、浄土山、奥大日岳の鮮やかな緑と雪渓、青空。その緑や青を映す、みくりが池や池塘の数々。美しいものだけが取り巻く夏の室堂は、奇跡のような場所だ。



空と山を映すみくりが池



雷鳥坂で一休み

ここからが地獄みち。いったん 150mほど下って雷鳥沢、ここから 500m近く雷鳥坂を登って、やっと劔側の世界に転がり出る。劔沢キャンプ場は更に 200m下ってやっと到着だ。瑞牆・金峰に比べると、荷物はテント泊一式の外にヘルメット、ハーネス、カラビナが加わる。日程は1日多く、更に予備日を1日設けたので、不本意ながら食料も1日分増やすこととなり、どれだけ持っていけばいいかわからなくなった。何日分かを三食持ち歩く経験が少なく、どれくらい食べるのかよくわからないのである。あまり食べなくてもいい日も

あれば、とにかくお腹が空くときもある。結果、食料過多でさらに荷物が重くなってしまっていた。ただ、マットだけはかさばるけれど軽いものに変えたので、少しは救いになったと信じたい。雷鳥坂が辛かったのは私だけではなかったようで、後でFJさんが「あの道はきつかった」とこぼしていた。室堂から雷鳥沢に下る道の途中から、雷鳥坂の途中に吊り橋でも作ってくれることを切に願います。

と、書いたところで思い出した、この坂を登る黒シャツの若者集団。全員、見たこともないような巨大ザックを背負っている。見たところ



劔御前小舎前のトウヤクリンドウ

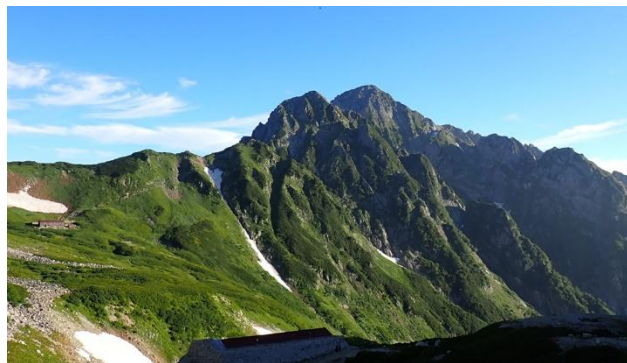
60kg くらい？女子も男子もしなやかな体を腰から折り曲げて重さに耐え、黙ってかなりのスピードで坂を登っていく。後から一人、少しお兄さんくらいの年齢の人が、同様な荷物を持って厳しい顔で登ってきた。黒シャツには「富山県警察山岳警備隊」。人命救助に尽力してくれる山岳警備隊のトレーニングだったのだ。何かあれば人を背負う強さも、こうした地道な訓練あってこそ。その何分の一かの荷物で文句を言う未熟者には尊敬と感謝しかない。



劔沢キャンプ場から、日が暮れる前にご挨拶できました

劔沢はガスが広がり、肝心の劔岳は雲の中。今日はお目にかかれなないかとも思っているが、それぞれ場所を陣取ってテント受付へ。1人1泊千円也。納得の価格。ちなみに前回の富士見平は二千円だった。

お疲れ様の宴に入ろうとしたところ、ぱらぱらと雨が降ってきた。本降りにはならないがいつまでも降っている。各自お湯を沸かして、寝不足と疲労でぼんやりした頭のままお腹を満たし、明るいうちにテントに入った。夕方、日も暮れかけた19時頃、FJさんの「劔、見えてますよ！」という声で目が覚めた。急いで外に出ると、劔岳がどっしりとした姿を見せてくれていた。



おはようございます

2日目。夜中の2時過ぎからテントの外はヘッドライトが行き交っている。4時頃起きて外に出てみると、真っ暗な劔岳には既にライトの列が。山頂にもライトが見えている。どうしてこんな早くに取りつく人が多いのか謎だったが、後でその理由がわかった。我々はすっかり日が登って明るくなった6時過ぎに出発。どうやら最後発のようだ。開き直って「よーし、のんびり行くぞ！」「おー」と歩き出したら、

テント撤収中の人々が「行ってらっしゃーい」と優しく声をかけてくれた。

登山口のある劔山荘までいくつか雪渓を渡るが、日は高く登り、正直かなり暑い。これはバテるかもしれない、もっと早く出ればよかった、と後悔しかけたが、FJさんが「いやー、人が少なくていいよ」、「早く行って早く下山しても、暑いキャンプ場ですることないし」と前向きな考えを何度も述べてくれ、それもそうだと考え直す。劔山荘ではスタッフが日を浴びてラジオ体操をしていた。

夏の高山植物を愛でながら高度を上げる。道はだんだん険しくなり鎖場が出てきた。険しく切れ落ちていたり、垂直に近い岩場だったり。一步一步、あるいは手を動かすごとに「三点支持、三点支持」と言い聞かせた。

途中で下山第一号の人とすれ違った。何時ごろ出発したのかと聞くと、「3時半頃かな」。6時頃に山頂に着いたとのこと。日



クルマユリとハクサンフウロ

の出には間に合わなかったようだ。ついでになぜ早く出たのか聞いてみたら「うーん、渋滞を避けたいのと、暑いのを避けたいからかな」。なるほど。玉の汗を顔中に浮かべて、若干興奮気味に、すごく嬉しそうな顔をして答えてくれた。

先頭のFJさんの装備を見て「あ！カラビナ！」と声をかけてきた下山中の人がいた。多くの人がハーネスを付けずに登頂しており、その人もそうだったのだが、途中で怖いところがあって、カラビナがあれば、と思ったそうだ。

私が一番怖かったのは、幅30cm程、4mくらいの長さの手すりなしの橋だ。下を見ると絶対に足が出ないので、自分の1mくらい前だけを集中して見て

渡る。更にここから、鎖はあるが、岩をぐるっと回り込む絶壁が続き、KMさんが先頭を行くFJさんに「カラビナ使って！」と声をかけた。そうだ、これはテレビで見覚えがある。登山ガイドさんがカラビナの使い方を示していたまさにその場所だ。何度も見ていたそのシーンの注意事項が自然と思い出され、私もカラビナを鎖にかけ、かけかえするときはもう一方の手で鎖をつかんで自身を確保しながら、無事通過した。先程の人もここが怖かったのかも。登りの名物「カニのタテバイ」も出てきた。おお、ついに！しっかり登り切って上機嫌。やがて早月尾根との合流点を過ぎ、10分ほどで山頂に到着した。



出た！カニのタテバイ



やった！山頂到着！

山頂は人が多く、お社の前で記念写真の列ができています。顔見せの前向きと、SNS用の後ろ向きの両方で写真を撮る人が多い。私たちも互いに写真を撮り、立山が見える方向に腰を下ろして休憩。時間があるので、焦らずのんびり剣岳山頂を味わった。山頂の岩にキアゲハが止まっている。上手に上昇気流に乗って、こんな高所にもやってくるんだ。別ルートから登頂したことのあるKMさんが、北側の池の平山とか東側の源次郎尾根を指さして示してくれる。北方稜線は、一般登山者は入らないようにとプレートが打ち付けてあった。

40分ほどしてから下山にかかる。うっかり早月尾根に入りかけ、修正。下りの名物「カニのヨコバイ」も無事通過。他の鎖場も、三点支持をおまじないのように頭の中で唱えて通り過ぎる。前剣頂上で、「登りは通らなかったから嬉しい」とFJさん。更にいくつか岩場を乗り越えて、ようやく一服剣へ。ここまで来ればかなり安心、ゆっくり一服だ。その約30分後に、登山口のある剣山荘に戻ってきた。

朝とは違い、テラスは登山客でにぎっていた。ここで迷わずTシャツを購入。FJさんは横文字のおしゃれなデザイン、私



下りの名物、カニのヨコバイ

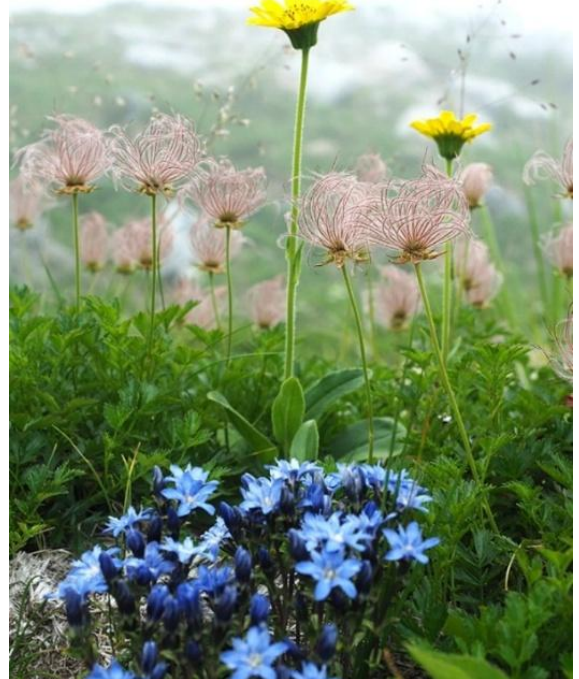


今日一日遊んでもらいました。ありがとう、劔岳

は背中に漢字ででかでかと「劔岳」と書いてある、妹に言わせると「おじさんぽい」デザインを選んだ。センスの違いが見事に現れた。疲れもあるし、達成感で気分もすっかり緩み、劔山荘のお水を思い切り飲んで、テラスの椅子に座ってリラックス。いつまでもここにいたいような感じになりかけ、重い腰を上げてあと一息、キャンプ場に向かって出発。途中の雪渓で浴びた冷気のシャワーが「おかえり！」と労ってくれるようだ。

キャンプ場に到着し、装備を解いて着替え、お疲れさまの打ち上げをしようとしたらまた雨がパラパラ。KM さん配布のミニラーメンをいただき、晩御飯のパスタを食べて、お茶を沸かし始めたところ、本格的に降り始め、慌てて各自のテントに退散。この後、大雨となり、風も吹き、雷鳴こそ聞こえなかったが、夜は雷がピカピカとテントの外で光っていた。外に出て雷光に影と映る劔岳を見たかったが、なんせ大雨なので顔も出せない。どうも後から聞くと、この辺り警報が出ていたそうだ。ツエルトの KM さんと FJ さんは大丈夫かな、と心配だったが、じっと耐えている様子。翌日訊いたら、水はけが良かったので浸水はなかったとのこと。ただ、早すぎるツエルトへの退散で FJ さんは眠れなかったようで、30 分おきに時計を見てはため息をついていたそうだ。私のテントも問題なかったが、夜中 3 時ごろ、風にあおられてフライがバタバタ音を立て始めた。雨は上がっていたので外に出てチェック。ペグは問題なかったが、何か所か紐が緩んでいるところがあり、締め直して問題解決。

3 日目。よく風が吹いて、フライの裏側はからからに乾いていた。テント撤収。6 時半にキャンプ場を後にする。食料が思いのほか減らなかったのが、荷物が重いのは変わらない。うっすらガスのかかった斜面を劔御前小屋に向かって上っていると、雷鳥の親子がすぐ近くをお散歩中だった。雛が 4 羽、親鳥が 2 羽。ゆっくり観察させてくれた。坂を登りきると、高校性グループがものすごく身軽な恰好で下山していく。なんであんなに荷物がないんだろう？軽い嫉妬を憶えながら、雷鳥沢まで下りていく。雷鳥沢で荷物を下ろし、小さなあんぱんを 2 個食べて、室堂に至る地獄の階段を登る。みくりが池温泉で汗を流し、着替えてサッパリ。帰りはいろいろな乗り物をとっかえひっかえ乗り継いで大町側に出ることにしていたので、美しい室堂を何度も振り返りつつ、早めに帰途についた。大観峰でロープウェイと大きな山並みを眺め、黒部ダ



ウサギギク、チングルマ、ミヤマリンドウ



黒部ダムの放水と虹

ムで観光放水と大きな長い虹に見とれ、扇沢で美味しい破碎帯の水を少しもらって、信濃大町駅へ。ここでうまく切符が買えず、乗る電車がばらばらになってしまい、三人で乾杯ができなかったことが心残りだ。山では風邪もあってビールを飲まなかった。あずさでやっと、一人で乾杯。

劔岳は他の山とは明らかに違う。登る前の人生と登った後の人生は別物だと感じるほどだ。それはなぜだろう。噂にたがわず、一般登山者が登れる山としては、他とは段違いに難易度が高いと肌身で感じたことが一

つ。でも、ただ難しかったり怖かったりしただけではないような気がする。切れ落ちた岩を登り、降りるとき、ここで踏み外したり、手が滑ったりしたら死に直結する、と背中にヒヤリとしたものを感じながら、三点支持を一步一步頭の中で唱えて確実に進んだ。つまり、一步一步「生きる」ことを選択したのだった。数えきれないほどの「生きる」を選択した積み重ねが、改めて今「生きている」ことを意識させるのか。生まれ直しをしたような感じなのかもしれない。そんなことまで感じさせる山は、これまで他になかった。劔は本当に特別な山だった。

ところで、瑞牆・金峰での反省点が生かされたか、チェックしておこう。虫よけは持って行ったが使わなかった。森ではなかったからか、虫がいなかった。アタック用ザックは結局また雨蓋。「せっかくの劔なのに、またそれ？」と突っ込みを受けた。テント撤収は早めに起きることでかろうじて改善、荷物は使う道具と日数が増えた分、増えた。FJさんはツエルトのポールを新規購入、2泊3日常設できた。雨風にも立派に耐えた。

最後に、準備山行から2度にわたって一緒にいただいたKMさん、FJさん。テント泊に快適さを求めて荷物が重くなった結果、歩みが遅く、風邪まで引いていた私にお付き合いいただき、本当にありがとうございました。最高の夏の山行となりました。

《コースタイム》

8/2：室堂（10:20）～雷鳥沢（11:30）～劔御前小舎（13:35-13:55）～劔沢キャンプ場（14:30）

8/3：劔沢キャンプ場（6:20）～劔山荘（6:45）～一服劔（7:15-7:20）～カニのタテバイ（9:07）
～早月尾根分岐（9:36）～劔岳山頂（9:48-10:31）～早月尾根分岐（10:38）～カニのタテバイ（10:54）
～前劔頂上（11:49）～一服劔（12:55）～劔山荘（13:20-13:50）～劔沢キャンプ場（14:30）

8/4：劔沢キャンプ場（6:30）～劔御前小舎（7:20-7:30）～雷鳥沢（8:30-8:45）～みくりが池温泉（入浴）（9:40-11:05）～室堂（11:20）

※写真協力：FJさん

（終）